

家畜損害防止関連情報

◆ 第4回 生産効率向上のポイント

～自己流は失敗の元～

現在の牛群、施設で最大限に収益を上げる実力がなければ、いくら設備投資をしても収益は上がりません。

さらに乳価の切り下げがあった場合、負債につぶされてしまいます。今、酪農家にとって必要なことは、現状の「牛と草地と設備」で最大の生産効率を上げられる「牛群管理能力」を身につけることです。

泌乳量の急激な増加に伴い、経験と勘による飼養管理は限界にきており、科学的根拠に基づいた飼養管理技術が要求されています。

生産効率を上げるには、給与した飼料を効果的に体内で利用できる飼養管理をすることが重要です。

そのため、〈1〉良質粗飼料の量を十分に確保〈2〉粗飼料を先に給与しルーメンマット形成後に濃厚飼料を給与〈3〉1回の濃厚飼料の給与量は4キロ以下に〈4〉頻繁な飼料の変更はしない〈5〉給水は最大需要時間に合わせた設備に——など基本中の基本があります。

また、添加剤は、通常の乳量の牛群ではミネラルやビタミンなどの基本的な物以外は必要のない物です。添加剤に頼らなくてもいい牛群管理をすれば、十分、生産効率は上がります。添加剤への投資の余力があるのなら、良質粗飼料の購入費に切り替えましょう。

熱心な酪農家の中には、種々の講習会や酪農雑誌の情報を自己流で組み合わせて、結果的に大失敗をする例が多々あります。

ある飼料はA牛群に有効でも、B牛群には毒にしかならない場合もあり、一般論の、自分の牛群への直接導入は危険を伴います。

最も重要なことは、正しい飼料設計をしてくれる人を見つけ、その設計を全面的に受け入れることです。

飼料設計は総合的なもので、1品でも物や量が変われば、その設計は無きに等しいものになります。しかし、飼料設計内容は設計者の考え方で大きく異なり、設計が間違っていたら生産効率の向上は望めません。

ですから牛群検診では、「血液診断に基づいた飼料設計」をして、安全性を高めています。